

研究ノート

シンボリック相互作用論の書き換えに向けて

周 藤 真 也

1. はじめに

本稿の目的は、「シンボリック相互作用論」の書き換えに向けて、その趣旨を明らかにすることにある。

シンボリック相互作用論（symbolic interactionism）は、周知のようにアメリカ社会学の中で、いわゆる「パーソンズ以後」の社会学の「解釈的パラダイム」の展開の中で、その一翼を担う学派として位置づけられてきた。しかしながら、筆者の見解によれば、ブルーマーらが主張する「シンボリック相互作用論」の議論は、首肯できる部分が多くあるものの、学問的な立場の基本的な点において大きな錯誤が含まれていると考える。筆者は、その原因は、シンボリック相互作用論が、観念論の本質を見誤ったことと、社会学の学問的対象を行為者間の相互行為（いわゆる社会的相互作用）に見出そうとしたことにあると考えている。

これらの点において、筆者は、シンボリック相互作用論を書き換えなければならないと考えるが、本稿ではそれに向けた議論の整理を行う。本稿の論旨は次のとおりである。

- ① ブルーマーは、「観念論の伝統的立場」の取扱いを誤っている。その誤りは、当時
の实在論的な社会学あるいは科学の立場からすれば必然的であったかもしれないが、
「言語論的転回」を経た今日の知見からすれば、承服することはできない（2節）。
- ② シンボリック相互作用論は、具体的な人間同士の相互行為を前提とする社会学的人
間観、経験的世界観を構築している。しかし、これは、経験的世界のあり方の一つに
すぎず、また可能な人間観の一つにすぎない（3節）。
- ③ ②にもかかわらず、ブルーマーの主張する「シンボリック相互作用」そのものは、
「社会的相互作用」とは区別される自我論として構成されており、ブルーマーが退け
たところの「独我論」に近いものになっている。そして、「シンボル」あるいは「シ
ンボリック」なる語は、ミードの「有意味シンボル」概念に依拠するものの、明確な
像を結んではない（4節）。

- ④ これらの問題を解決するためには、ブルーマーの「シンボリック相互作用論」を独我論として書き換える必要がある。その方法は、いくつかあり得るが、そのひとつのアイデアとしてラカン派精神分析学の語法に準拠することが考えられる（5節）。

2. シンボリック相互作用論における観念論の取扱い

ブルーマーは、シンボリック相互作用論的方法的位置についてまとめた論文の中で、「観念論の伝統的立場」に対して、次のように主張する。

「現実の世界 world of reality」とは、人間経験の中にのみ存在し、それは、人間がその世界を「見る see」という形式においてのみ現れる。(p. 28)

人間の心像 human imagery の形式でかたちを与えられていないような、いかなる「現実の世界」に関する特徴づけの実例も引用できない。人間が指示したり言及したりするようなものと以外に、何ひとつとして人間には知られていないのだ。あるものごとを指示するためには、人間は、それを、そのパースペクティヴから見なくてはならない。人間は、そのものごとを、自分に対して現れるものとして記述することしかできない。この意味では、経験的世界は常に人間がそれについて持つ像や認識の形式でしか存在できないのが当然であるという主張は、まったく正当なものである。(p. 28)

つまりブルーマーは、「経験的世界は常に人間がそれについて持つ像や認識の形式でしか存在できないのが当然であるという主張は、まったく正当なものであり、「観念論の伝統的立場」を「論争の余地がないもの」であるというのである (p. 28)。

しかしながら、ブルーマーは、他方では、「現実」を経験的世界から心像や認識の領域へと移行させることに反対の立場を主張し、そのような「独我論的立場」は「経験科学を不可能にしてしまう」と主張する (p. 29)。

経験的世界は、人間にとって、心像またはその認識との関連においてしか存在しえないのであるから、したがって、現実もまた、経験的世界とは独立に、心像や認識の中において探究されるべきであると考えたら、それは間違っている。このような独我論的立場は、支持することができないし、経験科学を不可能にしてしまうものだ。(pp. 28-9)

ブルーマーがこのような立場を支持できないのは、経験的世界が、「われわれのそれに対する心像や認識に対して、挑戦してきたり、抵抗したり、屈伏するのをこぼんだりするという意味において、語り返してくる talk back からである (p. 29)。そして、「この抵抗 resistance が、経験的世界に対して、現実の証であるところの頑固な性質 obdurate character を与える」ものであり、この性質、このはたらきが、「経験的世界の存在を要求

し、それを正当化するもの」であると言い、实在論者の主張に対して正当性を与えている (p. 29)。

だが、ここでブルーマーは一つの誤りを犯しているのではないのか。ブルーマーは観念論者の陥る議論を、現実や経験的世界とは独立に、心像や認識の中において探究するものとして位置づける。しかし、「観念論」にしたがえば、経験的世界も現実も、そもそも心像や認識の中においてあるのであるから、心像や認識から独立して捉える必要はない。「観念論の伝統的立場」を首肯するのであれば、当然このように主張するべきであるけれど、ブルーマーはそうのように捉えないのである。

もちろん、ブルーマーがこうした主張をした背景には、心像や認識を問題としたとき、心理学的あるいは哲学的に還元されることによって、社会（科）学が独自の学問の対象をもたなくなる可能性を危惧したことが考えられるだろう。現にそのようにして還元したときに、社会（科）学は可能なのかという主題が、19世紀末から20世紀初頭にかけての社会学の確立期におけるデュルケームやウェーバーといった社会学者たちにとって、重要な主題となったことが、社会学史上の「事実」とされていることはいうまでもない。

しかし、だからといって、ブルーマーは、实在論との間で、本来的には安易に妥協する必要はまったくなかった。ブルーマーが探究しなければならなかったのは、経験的世界も現実も、そもそも心像や認識の中においてあるのであるから、それを前提としていかに社会（科）学は可能（不可能）なのかという課題ではなかったのか。

筆者は、これを、实在論との間の必要のない妥協であり、ブルーマーのシンボリック相互作用論は中途半端なものに留まる結果となった原因であると考ええる。そして、これは、ブルーマーが安易に退けた「独我論」にこそシンボリック相互作用論の可能性が所在していると考ええる所以となる。

3. シンボリック相互作用論の人間観・世界観の問題

ブルーマーらのシンボリック相互作用論は、観念論の取扱いを誤っていることを確認した。そして、その誤りは、ブルーマーの主張が、心像や認識の中において探究するものとは別に、経験的世界や経験科学が探究すべき現実が實在していると思い込んでいるところに存している。では、ブルーマーが主張する、社会学が探究すべき経験的世界や現実とは何か、ということを次に確認しなければならない。

社会学が探究すべき経験的世界や現実とは、シンボリック相互作用論においては、いくつかの基本アイデアとして提示される「根本イメージ (root image)」としてブルーマーによって表されている (p. 7)。

こうした根本イメージは、次のようなものごとの性質に言及し、それを記述している。人間集団または社会、社会的相互作用、対象、行為者としての人間、人間行為、行為の相互連携。全体として、これらの根本イメージ群は、シンボリック相互作用論が人間の社会と行動をどう見るかということをあらわしている。それは研究と分析のための枠組みをなすものである。(p. 7)

そして、ブルーマーは、これら根本イメージのそれぞれについて、検討を加えていく(pp. 7-26)。本稿では、ブルーマーが行った各イメージの検討すべてを紹介することはできないが、「人間集団または社会」については、「人間集団または社会とは行為の中に存在するものであり、行為との関連で検討されなくてはならない」とする「行為としての人間社会」という像を提示し(p. 8)、「社会的相互作用」については、「集団生活は、必然的に、集団成員の相互作用を前提」にしており、「ひとつの社会とは、お互いに相互作用している諸個人からなりたつものである」とし(p. 8)、「行為の相互連結」においては、「人間集団とは、集団の構成員が、お互いの行為を適合させることから成り立ち、また、その中に存在する」と定義する(p. 21)。そうして、ブルーマーは、次のように結論づける。

このアプローチでは、人間の社会を、生活にかかわっている人々としてとらえる。このような生活とは、参加者たちが、自分たちの直面する多種多様な状況の中で行為を形成していく、進行中の活動というひとつの過程なのである。彼らは、自分たちの発達していく行為をお互いに組み合わせなくてはならないような、巨大な相互作用過程にとらえられている。この相互作用の過程は、他者に対して何をすべきかの指示を行い、また、他者による指示を解釈することから成立している。彼らは、対象からなる世界に生きており、こうした対象の意味によって、自分たちのオリエンテーションと行為に方向づけを与えられる。彼らの対象は、彼ら自身という対象も含めて、彼らが他者と相互作用することによって形成され、維持され、弱められ、また変容されていく。(pp. 26-7)

ここで注意しなければならないのは、ブルーマーは、経験的世界を、何の断りもなく、人間集団または社会、社会的相互作用、行為者としての人間／人間行為、行為の相互連携に置き換えていることである。ブルーマーは、ここにおいて、「哲学学説としてのシンボリック相互作用論ではなく、経験的な社会科学のパースペクティブとしてのシンボリック相互作用論」を標榜し、「人間集団と人間行動」をその経験的世界の座に据えている(p. 27)。

しかしこのことが、重大な問題を招くものであることに、ブルーマーは気づいていないように思われる。すなわち、ブルーマーは、ここで「行為者としての人間」なる像を提示していること、そしてその行為者とはブルーマーの考える人間集団や社会との関係におい

て定義されていること、そしてそうした「人間集団と人間行動」の世界を、経験的世界として定義していることである。そして、その人間像は人間集団や社会の研究において提示されていた。すなわち、「行為としての人間社会」という発想である。

こうした発想は、行為の中に人間たる所以を見出すという点において、パーソンズの「主意主義的行為」の概念に通じている。そればかりか、ブルーマーのこうした定義は、かつてパーソンズの社会学理論に対して、首尾よく社会規範を身に着ける「過社会化された人間像」(D. Wrong)や「文化的判断力喪失者」(H. Garfinkel)といった、パーソンズの社会的人間観が、パーソンズ批判の文脈の中で大きな問題となったことを想起させるに十分である。

では、相互行為を行う者としての行為者像の何が問題となりうるのであろうか。もっとも考慮しなければならないことは、具体的な行為者との間の相互行為を特権化することである。このことによって、たとえば「一般化された他者」との間の相互作用や、そもそも相手の行為者が自己と同格の他者ではない可能性を周縁化させてしまう。

このことは、ブルーマー自身の主張にも反するものになりかねない。ブルーマーは、「自分自身に対して指示を行うという社会的な過程を通して、自分自身と相互作用する生命体として人間を認識する」という点において、「人間は、はるかにいっそう深い意味において『社会的』であるとみなされる」のであるから、「シンボリック相互作用論の人間観は、〔従来の社会科学の人間観とは〕根本的に違うものである」という(pp. 17-8)。だから、ブルーマーにおいては、社会的相互作用はそうした自分自身との相互作用を含めても然るべきであるだろう。しかしながら、ブルーマーは、行為者の間の相互行為として、社会的相互作用を定義してしまうのである(p. 9)。

ブルーマーのシンボリック相互作用論が前提とした社会的相互作用としての経験的世界は、シュッツの多元的現実論で言えば、われわれが現実のアクセントを置きうる、限定的な意味領域の一つに過ぎない。それが「至高の現実」であるとしても、他の「限定的な意味領域」に、現実のアクセントを置くまでにおいてである。あるいは、他我問題に対し、われわれの世界がはじめから他者たちの住まう世界であるとする「他我の一般定立」は、われわれの経験的世界が実際にそうになっているというよりも、自然的態度において人々はそのようなものとして世界を捉えていると分析したものであると捉えるならば、これもまた一つの限定的意味領域にほかならない¹⁾。つまり、社会的相互作用(=相互行為)としての経験的世界とは、経験的世界が、実際にそうになっているというより

1) シュッツの「多元的現実論」において、「日常生活の世界」を「至高の現実」として捉えているとする支配的解釈に対して、シュッツ自身においても「日常生活の世界」を「至高の現実」としては捉えきれておらず、すべての「限定的意味領域」が「至高の現実」でありうる可能性については、周藤(2000, 2003)で指摘している。

も、シンボリック相互作用論において定義される経験的世界であるのである。こうした点において、社会的相互作用としての経験的世界とは、シンボリック相互作用論が定義する経験的世界の像であって、本来的に社会学が研究対象とする経験的世界ではないかもしれないのである。

では、なぜブルーマーがこのような誤りを犯したのか、そこには、ブルーマーの経験科学に関する科学観が介在していると見ることができる。現に、論文の後半は、こうしたブルーマーの経験的科学に対する科学観の表明に割り当てられている。ブルーマーは、次のような問題が無視できないと主張する。

どのように経験的世界をみるか。どのように問題を立てるか。どのようにデータを選定するか。どのようにデータの関係を確定するか。どのようにそのデータの関係を解釈するか。そして、どのように概念を使用するか。(p. 35)

もうお分かりであろう。ブルーマーの誤りは、経験的世界が、研究に先行しそれをシンボリック相互作用論によっていかに記述されるのか、という発想に存している。ブルーマーに欠けているのは、経験的世界は、それを捉える方法それそのものによって構成されるという視点である。ブルーマーが組み立てるのは、シンボリック相互作用論という方法において構成される経験的世界であり、それが「人間集団と人間行動」の世界として社会科学の対象としておかれるとき、そのようなものとして置いているということにほかならないのである。

ブルーマーは、経験的世界について、われわれのそれに関する像や、それに関する主張に対する抵抗を、経験的世界に対する現実の証であるところの「頑固な性質」として重要視していた。それにもかかわらず、ブルーマーは、シンボリック相互作用論で定義する経験的世界の像に関して、それに対する抵抗を見ていないのである。あるいは、まさに抵抗があることにおいて、その経験的世界に関する記述を正当なものとして錯覚しているのかもしれない。

筆者の以上の主張は、「言語論的転回」以後の世界観に大いに関係している。「言語論的転回」以後の世界観にしたがうならば、経験科学とは、その記述が経験的世界そのものになるものである。だから、そのためにブルーマーが主張したように「経験科学とは、研究されている経験的世界がもたらす抵抗を、うまく取りあつかい、それを調整するための、イメージや認識を発達させようとする営為」(p. 29)であるとともに、まさにその結果として、経験的世界そのものでなければならないことである。そして経験的世界とは、我々の経験する世界そのもののことであるのだから、ブルーマーのように何らかの形で限定を付けることはできないのである。

結論から言えば、ブルーマーらのシンボリック相互作用論が、「行為者としての人間」

を前提とし、社会的行為を対象とするいわゆる方法論的個人主義に立つものであるならば、個人化・民主化の程度が不十分なものに留まっている。そして、こうしたブルーマーの科学観は、「言語論的転回」を経た今日の社会学においては、もはや使用に堪えられなくなっているのではないのか。

なお、ブルーマーが社会的相互行為として社会的世界を記述するのは、ブルーマーが社会学者である以上、当然ではないかという意見もあるかもしれない。しかし、そのような考えは、社会学という学問を理解していないものである。およそ社会学が社会的な科学 (social science) であるのなら、それは社会についての科学 (science of the society) ではないし、社会的なものについての科学 (science of the social) ですらない。社会的とは、その科学の対象がもつ性質ではなくして、その科学そのものがもつ性質として達成されなければならない、経験的世界が社会的であるか否かとは関係がないし、社会的世界を対象とすることによって「社会的である」ことを確保することは、端的に間違った方法である。

以上のようにブルーマーの「シンボリック相互作用論」の学問的立場に対する主張には、錯誤があるものの、ブルーマーの記述やブルーマー以後のシンボリック相互作用論には、依然としてそれでもなお注目すべき論点がいくつもあるように思われる。そのことを探究するとき、シンボリック相互作用論が、「シンボル」をどのように考えていたのかを検討することが必要になるとともに、それを通して、ブルーマーにおける「シンボリック相互作用」と「社会的相互作用」との関係性も明らかになってくる。

4. シンボリック相互作用論のいう「シンボリック」とは

ブルーマーらが「シンボリック相互作用論」を主張するとき、何を「シンボリック」であると捉えているのか。実のところ、ブルーマーは明確には書いていない。ブルーマーは、シンボリック相互作用論の前提は、次のような「三つの明快な前提に立脚したものである」という。

第一の前提は、人間は、ものごとが自分に対して持つ意味にのっとって、そのものごとに対して行為するというものである。(中略) 第二の前提は、このようなものごとの意味は、個人がその仲間と一緒に参加する社会的相互作用から導き出され、発生するということである。第三の前提は、このような意味は、個人が、自分の出会ったものごとに対処するなかで、その個人が用いる解釈の過程によってあつかわれたり、修正されたりするということである。(p. 2)

ブルーマーは、シンボリック相互作用論の特徴として、ものごとが自分に対して持つ意味の源泉を、ものごとに内在的で客観的な構成の自然的な部分をなしているとみなす哲学における伝統的な「實在論」の立場や、ものごとの意味を心理的な構成要素の中に位置づ

ける心理学的な立場ではなく、人々の相互作用の過程で意味は生じたものであり、そうした意味では「意味は社会的な産物と考えられる」という (pp. 4-5)。ブルーマーによれば、「ものごとの意味は、社会的相互作用の文脈の中で形成され、人々によってその文脈から引き出されるものである」というのだ (pp. 5-6)。そして人々による意味の使用は、「このようにして導き出された意味を、単に適用する」のではなく、「個人がその行為の中で意味を使用することが解釈の過程を含んだものである」ことを強調する (p. 6)。「行為者による意味の使用が、ひとつの解釈の過程を通じて生じる」のである。「意味は、自己との相互作用 self-interaction の過程を通して、行為の中でその役割を果たすものだと考えなくてはならない」 (p. 7) というのである。

ブルーマーは、「シンボリック」あるいは「シンボル」の意味を説明するのに、ミードの議論を参照する。ブルーマーは、ミードが、「人間社会における社会的相互作用の二つの形式または水準を特定化したこと」に注目する。一つは、「個人が他者の行為に対して、その行為を解釈することなく直接に反応するときに生じる」ミードの言うところの「身振りの会話 conversation of gestures」であり、ブルーマーはこれを「非シンボリック相互作用 non-symbolic interaction」と名付ける。もう一つは、個人が他者の行為に対して、「その行為の解釈を含んだ」ミードの言うところの「有意味シンボルの使用 use of significant symboles」であり、ブルーマーはこれを「シンボリック相互作用 symbolic interaction」と名付ける (p. 10)。そして、「人間に特徴的な相互作用の様式は、人間がお互いの行為の意味を理解しようとする場合のようなシンボリックな水準にある」という (p. 10)。

ブルーマーは、人間のあいだで生じる相互作用がもつ独自性を、「人間が、おたがいの行為に対して単純に反作用するのではなく、他者の行為を解釈または「定義」しているという事実によるもの」に認める。

おたがいの行為に対する人間の「反応」は、直接的にはなく、こういう行為に付与されている意味にもとづいて行われる。したがって人間の相互作用は媒介されたものである。シンボルの使用、解釈、または他者の行為の意味の推定によって、人間の相互作用は媒介されている。これは、人間の行動では、刺激と反応の間に解釈の過程をはさむことと同義である。(p. 102)

しかし、こうしたブルーマーの議論は、シンボリック相互作用を自己における解釈過程に充てることを通して、社会的相互作用とは区別されるものになっていると思われる。なぜなら、「ものごとの意味にのっとって人間はものごとに対して行為する」というブルーマーは、社会的相互作用での意味の創発を認めるものの、個人の解釈の過程における解釈とその修正、その結果として生ずる社会的行為に対して焦点を当てるからだ。そこでは、そうした自己における過程、すなわち「自己の世界」が経験的世界となっており、それに

対して「社会的世界」は「抵抗」として現れるのである。

こうしたブルーマーの議論の自我論的構成は、ブルーマーの議論が、むしろ独我論に漸近するように見える。そして、そうした「自己の世界」において、「シンボル」あるいは「シンボリック」なものとは、「自己」と「社会的世界」を繋ぐメディアとして存在しているのである。

5. シンボリック相互作用論を書き換える

ブルーマーの議論において、ほとんど明確な定義を与えられていないシンボル／シンボリックという概念をどのように扱うのか。ブルーマーの議論における、「自己の世界」と「社会的世界」の分裂をとどのように扱うか。なぜ、ブルーマーは、「シンボリック相互作用」を「自己」についての議論において扱い、「社会的相互作用」の議論において十全と扱わないのか。われわれは、これらの問題が、ブルーマーの観念論に対する認識の不十分さに起因していると考えることができる。

これらの問題を解決する方法は、一つしかない。すなわち、「社会的世界」を、「自己の世界」における下位形態の一つとして位置づけることであり、そのことによって、社会的相互作用を含む「社会的世界」を、「自己の世界」と一致させることにおいてである。

このことは、経験的世界を社会的世界として定義するのではなく、経験的世界ははじめから社会的であるという可能性に身を任せることである。そうすることによってはじめで、いわゆる「社会的世界」は、「自己の世界」として記述することが可能となる。

筆者は、ブルーマー以後のシンボリック相互作用論からの影響を受けたとされる、いわゆる「意味学派」の研究のすぐれた研究は、そうしたものとして経験的世界を記述することに成功してきたと考えている。しかしながら、そうでない研究も多く存在してきた。それらの研究を行う研究者の多くは、社会的相互作用によって満たされた社会的世界こそが社会学の研究対象であると信じてきたように思われる。だが、それはいまや相互行為の中に社会的なものを、あるいは社会を、「想像の共同体」として見出そうとする試みであったことが明らかとなった。そうした志向は、たしかにかつて他者とともに実際に在ることが自明であった人間においては、必然的なものであっただろう。だが、個人化・民主化がほぼ完全な形で浸透しているこんにちにおいて、もはやそうした志向にのみ頼っていくことは時代遅れになってしまったのではないのか。

われわれのこんにち的な課題は、次にある。社会的世界を「箱庭化」しないこと、「箱庭」にすぎない「社会的世界」に認識者が埋没しないこと。すなわち、〈私〉の世界においても、いわゆる社会的世界においても共通して経験的世界を記述できる方法は何か、ということである。それは、必然的に「独我論」を世界を記述する方法論として採用するこ

とである²⁾。そして、そのようなものとして、シンボリック相互作用論を書き換えることである。

その方法は、「シンボル」の扱いに存していると考える。それでは、どのように書き換えうるのか？—その方法は、いくつかありうると思われるのであるが、本稿では最後に、一つの案としてラカン派精神分析学の語法により記述することを提案しておく。

ラカンの議論の特徴は、経験科学／認識によって捉えられる経験的世界を、象徴界 (le symbolique) と定義することである。そして現実あるいは現実界 (le Réel) をその外部に、そして決して接近できないものとして位置づけることにある。世界とは体系化されたシンボルであり、それに適合的なように認識図式を作ることが世界を認識することにはかならない。そして、科学的認識もまた、そうした認識図式のひとつであることに於いて、一般的なものの見方と同等である。

ところで、ラカンの議論にしたがえば、「現実」は決して接近できないものであるとともに、言語によって記述することによってしか表現できないものである。こうした性質を考えるならば、つまり、ラカンで言う「現実」とは、ブルーマーが言うところの「抵抗」である。

ブルーマーは、「経験科学とは、研究されている経験的世界がもたらす抵抗を、うまく取りあつかい、それを調整するための、イメージや認識を発達させようとする営為」(p. 29) であると主張した。しかしながら、抵抗／現実に対し、うまく取りあつかい、調整することは、認識というものが一般にもつ性質である。では、科学的認識は、一般的な認識とはどこが異なるのか。それは、本質的には差異はないのであるが、次の可能性に集約されるであろう。

経験科学が、それによって認識／記述される世界そのものが、経験的世界であることを標榜するとき、そこでは認識／記述される世界に対する違背 (= 抵抗／現実) そのものが原理的に起こり得ないものとして扱われるであろう。そうしたときに、その違背は、認知的に排除されるのではなく違背の可能性を先取りしつつ、イメージや認識を発達させるのではなく自らの認識のうちに含めながら展開していくことになるであろう。

したがって、そうした経験科学は、基本的に想像界 (l'imaginaire) に関係しているということになる。

文献

Blumer, Herbert, 1969, *Symbolic Interactionism: Perspectives and Method*, Prentice-Hall. = 1991, 後藤将之 訳『シンボリック相互作用論——パースペクティヴと方法』勁草書房。

2) 筆者は、すでに周藤 (2003) において、独我論を「社会学的排除」から自由な方法的規準として社会学を批判的に再構成する可能性をもったものとして提示している。

- 周藤真也, 2000, 「日常生活の世界と自然的態度の記述—— A・シュッツとW・ブランケンブルク」『社会学ジャーナル』 25: 71-82.
- , 2003, 「アンチ・アンチ・ソリプシズム—— A・シュッツと独我論をめぐる関係性から」『年報社会学論集』 16: 250-260.

*本文中で指示する文献のページは、Blumer (1969=1991) の訳書に依拠している。

*本稿は、2012年9月1日に立命館大学衣笠キャンパスで開催された第7回日本社会学理論学会大会における口頭報告に基づいている。

